

厳しい書記長と包容力のある委員長 VS 悪辣日本人経営陣 UAゼンセン・ワークショップで模擬団交

ITUCミャンマー事務所・所長 中嶋 滋

労働組合の民主的な運営と交渉力の強化を促進するために、UAゼンセンがITUCミャンマー事務所およびFTUMからの要請に応え、2日間のワークショップを実施した。これは、UAゼンセンが1年間で計6回(14年5月～15年3月の奇数月)にわたってヤンゴンあるいはマンダレーで実施するワークショップの初回であった。25名の参加者は、工業団地にある縫製、製靴、プラスチック成型、段ボール、水産加工、飲料などの工場労働者が組織する労組の代表である。平均年齢29歳という参加者の半数以上は女性で、活気に満ちたものとなった。UAゼンセンから、内堀良雄中央教育センター長、郷野晶子国際局長が参加。内堀氏から「労働組合とは何か?その民主的な運営とは」と「いかに要求し、いかに交渉するか」について、日本の法制度や組合運動の実態を紹介しながら、ミャンマーの労働組合運動に参考材料を提供するとして、踏まえるべき基本事項について丁寧な説明がなされた。参加者からは、実際に抱えている課題をベースにした質問が出され、これに対する親切丁寧な回答がなされた。熱心にメモを取りながら討論する参加者の真剣な姿は、感動を与えるものがあった。

ワークショップの最後はエキサイティングな模擬団交だった。15%の減益を口実に10%の人員削減と10%の賃金ダウンを提案した使用者側(講師陣)と、参加者が選んだ執行部7名との間で行なわれた。団体交渉能力向上をめざした講義の中で「強硬派で憎まれ役の書記長」と「包容力のあるまとめ役の委員長」という役割分担も時として必

要とのアドバイスを得ていた組合側は、感情に走らない理詰めの交渉のために事前準備が重要との指摘も踏まえ、適役の人選をしたようだった。ストも辞さない決意の下、執拗に経営内容の情報開示を求め、再建に共同で取り組む姿勢を示しながら提案の全面撤回を求める交渉は、なかなか迫力があつたが、経営権を楯に使用者側が応じず団交は決裂。しかし、組合側が最終場面で、賃下げに応じることはあっても人員整理には絶対に応じないとの姿勢を示したことは、組合の存在意義を示すものだった。



ワークショップの参加者

ストリートベンダーに無情の雨

雨期に入り雷鳴とともに激しい雨が1日数回降る。雨期とはいえ時々晴れ間が見え束の間の日照

りが楽しめる時もある。そんな時、日本の都市部では見ることができなくなって久しい、トンボが群れをなして飛ぶ懐かしい風景に出合う。しかし、一閃の稲妻とともに急変して突如叩き付けるような大粒の雨に襲われることもしばしばある。こうした時の第一の被害者は、新聞、タバコ、花などを路上で売っている「ストリートベンダー」と呼ばれる人々である。その多くは年端もいかぬ青少年少女である。傘を持つての商売が出来ない彼らは、天気模様を予測して、すばやく身をこなす以外に防衛策はない。一瞬の判断と行動の遅れが、我が身も商品もずぶ濡れにしてしまう。

この国の児童労働問題は非常に深刻で、日常生活の中でしばしば目にする。政府もこれへの対策に力を入れているという。その一環として昨年末に最悪の形態の児童労働を即時に廃絶することをめざすILO182号条約を批准した。しかし、国の経済状況、親の就業や貧困問題、小中学校から大量にドロップアウトする生徒など教育実態の改善などと複雑に絡み合うこの課題の解決は、一朝一夕にはいかないことは承知しているが、余りに遅々として進まない改善に苛立ちを覚える日々である。就労制限年齢違反の労働者の存在を貧しさ故の方便として容認せざるを得ないとする労働組合の対応も、致し方ないことなのか。

「ピンと高額が有利」の不思議

ミャンマーに来て多くの人が最初に驚くのは両替である。まずは、両替ができる外国通貨は、米ドル、ユーロ、シンガポールドルの3種類だけで、今や世界第2の経済大国となった隣国中国の元も、日本円も、貿易取引額第1位の隣国タイのバーツも両替は出来ない。ほとんど全ての観光客が訪れるアウンサン将軍市場などで、日本人にそうっと近づいてきて低い声で「マネーチェンジ、円OK」とかいう「闇円買い」の人の場合は別だが、「表」の世界では3通貨のみが両替可能である。

この3通貨でも、例えば空港内にあるMoney Changeに表示してある交換レートで両替できるとは限らない。そのレートで両替できるのは高額紙幣のみで、小額紙幣の交換レートは額に従い割安になる。米ドルの場合、100ドル札で1ドル960チャット、50ドル札で1ドル950チャット、20ドル札で1ドル940チャット、10ドル札で1ドル930チャット---という具合である。これらの交換レートは皺や汚れのない「ピン札」の場合のことであって、「ピン」でない場合は換えてくれない。「これしかない」と頼むとさらに率は低くなる。ホテルやレストランなどでもドルで支払う場合は同様な扱いとなる。

この俄には信じられない両替の現実、経済が自由化して人と物の行き来が激しくなれば、当然にスムーズなやり取りの障害になるケースが増す。ホテルやレストランなどでは客と揉めごとに苦慮しながら「銀行が受け付けてくれないから」と「ピン」でない札の受け取りを断っている。「元凶」は銀行にあるようだ。

最近、政府が札の取り扱いに関して、「ピン」であるか否か、高額紙幣か否かによって、差をつけてはならないとの通達を出したというが、事態は一向に変らない。知人の解説によれば、現在の取り扱いの中で生み出される差益を山分けしている腐敗が横行しているからだというのだ。銀行側と監督官庁側の双方に差益着服を利権としている者がいて、それが半ば公然となっているのに改革されようとしらないのが現実だという。「この国は腐りきっている」と知人は嘆く。これも最近のことだが、大統領が汚職撲滅に決意を新たに、「300,000チャットを超えるものは厳罰に処す」と述べたが、「それ以下ならばOK」と揶揄する空気があるのは、確かに嘆かわしい。労働者・庶民の厳しい生活状況を脇目に、不正な蓄財に励んで恬として恥じないエリート層が多くいるかぎり、この国の法治を基礎にした民主化の途は遠いと思わざるを得ない。